

弁証法の諸要素

1) 概念をそれ自身から規定すること[事物そのものがその諸関係とその発展とにおいて考察されねばならない];

2) 事物そのものうちにある矛盾性 (das Andereseiner), あらゆる現象のうちにある矛盾した諸力と諸傾向;

3) 分析と総合との結合.

弁証法の諸要素は、たぶん、このようなものである。

われわれはおそらく、これらの要素を、もっと詳しくはつぎのように示すことができよう:

弁証法の諸要素

- 1) 考察の客観性 (実例でなく、枝葉末節でなく、事物それ自身).
- 2) この事物の他の事物にたいする多種多様な関係の全総体.
- 3) この事物 (あるいは現象) の発展, この事物に固有の運動, それに固有の生命.
- 4) この事物のうちにある内的に矛盾した諸傾向 (および諸側面).
- 5) 対立物の総和および統一としての事物 (現象, 等等).
- 6) これらの対立物の, 矛盾した諸動向, 等々の, 闘争あるいは展開.
- 7) 分析と総合との結合, ——個々の部分の分解とこれらの部分の総体, 総計.
- 8) おおのの事物 (現象, 等々) の諸関係はたんに多種多様であるばかりでなく, 全般的であり, 普遍的である. おおのの事物 (現象, 過程, 等々) は [他の] おおのの事物と結びついている.
- 9) たんに対立物の統一ばかりでなく, おおのの規定, 質, 特徴, 側面, 性質のそれぞれの他のものへの [その対立物への?] 移行.
- 10) 新しい諸側面, 諸関係, 等々を開いていく無限の過程.
- 11) 事物, 現象, 過程, 等々にかんする人間の認識を, 現象から本質へ, それほど深い本質からいっそう深い本質へと深くしていく無限の過程.
- 12) 並存から因果性へ, そして連関と相互依存との一つの形式から他のいっそう深い, いっそう普遍的な形式へ.
- 13) 低い段階の一定の特徴, 性質, 等々の高い段階における反復, および
- 14) 古いものへの外見上の復帰 (否定の否定)
- 15) 内容の形式との闘争およびその逆の闘争. 形式の廃棄, 内容の改造.
- 16) 量の質への移行およびその逆の移行. ((15と16とは9の実例である))

弁証法は簡単に対立物の統一の学説と規定することができる。これによって弁証法の核心はつかまれるであろうが、しかしこれは説明と展開とを要する。

《したがって、もっとも豊富なものは、もっとも具体的なものであり、もっとも主観的なものである、そしてもっとも単純な深みに自己を取りもどすものは、もっとも強力なものであり、もっとも包括的なものである》(P349)

これに注意せよ：

もっとも豊富なものは、もっとも具体的なものであり、もっとも主観的なものである

注) (P) はヘーゲルの著書〈論理学〉のページ

ヘーゲルの著書《哲学史講義》の摘要

1915年に執筆

ヘーゲル. 哲学史講義 ヘーゲル全集, 第13巻

第38巻 P214

哲学史序論

37 ページ……《真なるものが抽象的であるならば、それは真ではない。健全な人間理性は具体的なものへむかう……哲学は抽象的なものをもっともきらい、〔人を〕具体的なものへ導き帰す》……

40 ページ：哲学史と円との比較——《この円はその円周に非常に多くの円を持っている》……

非常に深くて正しい比較！！

思想のそれぞれの色合い＝人間の思想一般の発展の大きな円(螺旋)の上の一つの円

全集第13巻. 哲学史第1巻 ギリシア哲学史

第38巻 P216～217

イオニア学徒の哲学*

《アナクシマン드로ス(紀元前610－547年)は、人間を魚から生じたものとした》
・(213)

ピュタゴラスおよびピュタゴラス学徒**

……《中心にピュタゴラス学徒は火を置いた、地球は、しかし、一つの星として、この中心体のまわりを円をえがいてまわっている、とした》……しかし彼らにあってはこの〔中心の〕火は太陽ではなかった……

* **イオニア学派**はミレトス学派とも呼ばれる(それは小アジア沿岸の古代世界の商業と文化との中心地である都市ミレトスに由来する). この学派はギリシア哲学史上もっとも早い自然発生的な唯物論学派である(エンゲルス. 《自然弁証法》, 国民文庫版, 第2冊, 10－11ページを見よ).

** **ピュタゴラス哲学**(紀元前6－4世紀)は、数をあらゆる事物の本質と見なす観念論哲学. この名称は、南イタリアの町クロトンに貴族政治の支配のためにたたかう哲学的＝

宗教的=政治的団体をつくったピュタゴラスの名まえにちなんでいる。10 という数を、ピュタゴラス学徒は、もろもろの数のあらゆる本性を網羅する、もっとも完全な数として神聖視した。

エレア学派* P 219

* **エレア学派**（紀元前6－5世紀末）の名称は南イタリアの町エレアからきている。事物のもとのものを変化しやすいものとみるミレトス学派やヘラクレイトスの自然発生的弁証法的学説とは反対に、エレア学派は、一つの、動かない、変化しない、同一の種類、たえまない、永遠の存在についての学説を持ちだした。それと同時に、エレア学派の代表者たちの若干の命題、とくに運動の矛盾性についてゼノンが持ちだした証明法（いわゆるゼノンの問題学）は、その結論が形而上学的なものであったにもかかわらず、古代の弁証法の発展のうえで積極的な役割をはたし、矛盾した運動過程を論理的概念に表現する問題を提起した。

全集第14巻. 哲学史第2巻

ソフィストたちの哲学* P 239

* **ソフィストたち**（ギリシア語のソフィストは知者の意）は職業哲学者たち、哲学と雄弁との教師たちの名称であった（紀元前5世紀の後半から）。ソフィストたちは単一の学派をなしてはいなかった。ソフィストたちに共通の、もっともいちじるしい特徴は、人間のすべての表象、倫理上の規範や評価を相対的なものと見る確信である。この確信はプロタゴラスがその有名な命題《人間は万物の尺度である。有るものどもについては、有るといふことの、有らぬものどもについては有らぬといふことの》のなかで表現した。紀元前4世紀の前半にソフィスト論法は墮落し、退化して無効果に論理的概念をもてあそんだ。

プラトンの哲学 P 251

プラトンの共和国について、およびそれは幻想だとする一般におこなわれている意見について語りながら、ヘーゲルは、彼の愛好の言葉をくりかえしている：

現実的なものは理性的である

……《現実的であるものは理性的である。しかし人は、なにが実際に現実的であるかを知り、区別しなければならない；普通の生活においてはすべてが現実的であるが、しかし現象の世界と現実性とのあいだには或る区別がある》……（274）